



映画づくりの次代をひらく 『京都太秦物語』

山田洋次監督に学び 共につくった2年間

立命館大学映像学部の学生たち



立 命館大学は2007年に映像学部
を開設した。そして松竹・立命館・
京都府による産学公の連携で、映画の都
京都に新しいエネルギーを育もうと、寅さ
んシリーズや『家族』『故郷』『幸福の黄色
いハンカチ』などの山田洋次監督を客員
教授に招き、同時に歴史ある松竹京都撮
影所内に専用スタジオと教室を確保した。
「映画は、多くのスタッフが汗をかき、ゼ
ロからイメージを共有し、実現していく
不思議な仕事です。一本の映画づくりを
一緒にやることでしか教えられない。」
「かつての大船撮影所は学校だった。教
え、伝え、成長する場づくりこそ必要な
んです。」という山田監督の強い信念から
だった。

と日常生活の調査と映像記録、主題設定
からキャラクターづくり、それらをもとに
シノプシスからのシナリオ制作を行った。
09年度の授業は「映画創作実践」と「学
外映像研修」。準備、クラシックインからア
ップまでの撮影、編集、音入れ、仕上げと、
学生たちは「山田組」のスタッフとして、
実際に助監督、照明、録音、美術などの
助手を担当し、さらには宣伝と上映まで
含めて、厳しい現場の全てを学んだ。
「家族団らんのシーンを20回も撮り直し
ました。日常そのままの再現を試みる監
督の姿に圧倒されました。」(美術/山崎
弘太郎さん)
「監督、スタッフみんなが向き合うなか
での、思いやり、ぶつかり合いは学校で
は学べないことでした。人が成長するう
えで欠かせないもの、それを監督は教え
たかったのだと思います。」(監督助手/
古寺綾香さん)
「地道な取材や準備の連続は、実際しん
どかった。しかし前よりもっと映画が
好きになりました。」(撮影・照明/吉田
卓功さん)
「張り詰めた本物の現場のなかで、自分
がどう動けば周りのためになるか考えら
れるようになりました。」(美術/川崎隆
博さん)
映画づくりに必要な能力や、人間や社
会に向き合う力の養成、学生たちの主体
的で責任を持つての実践など、日本映画
の明日を担う人材づくりへ、画期的な授
業だったのではなからうか。



『京都太秦物語』(2010年ベルリン国際映画祭招待作品)
大映通り商店街で育った大学図書館勤務のヒロイン、芸人を目指す幼なじみ、文字学研究者の青年の人間模様を描いた作品。第60回ベルリン国際映画祭の斬新な発想の作品を集める「フォーラム部門」に招待され、山田監督をはじめ10数名の学生も出席して注目を集めた。9月18日(土)より東京・東劇にて公開。大阪・なんばパークスシネマでも9月公開予定。
公式サイト <http://www.ritsumeai.ac.jp/eizo/kyotostory/>

※ シノプシス…演劇・映画など物語のあらすじ



立命館大学 映像学部映像学科
住 所 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学 衣笠キャンパス
開 設 2007年4月
定 員 数 150人(1学年)
教育内容 映像文化、映像プロデュー
ス、映像制作、映像テクノロ
ジー
電話番号 075-465-1990(事務室)
<http://www.ritsumeai.ac.jp/eizo/>



撮影は、大映通り商店街、おそば屋さん、広隆寺の門前、そして立命館大学 衣笠キャンパスなど、さまざまな場所で行われた。
写真提供 松竹